

近世青海諸部落の起源(下)

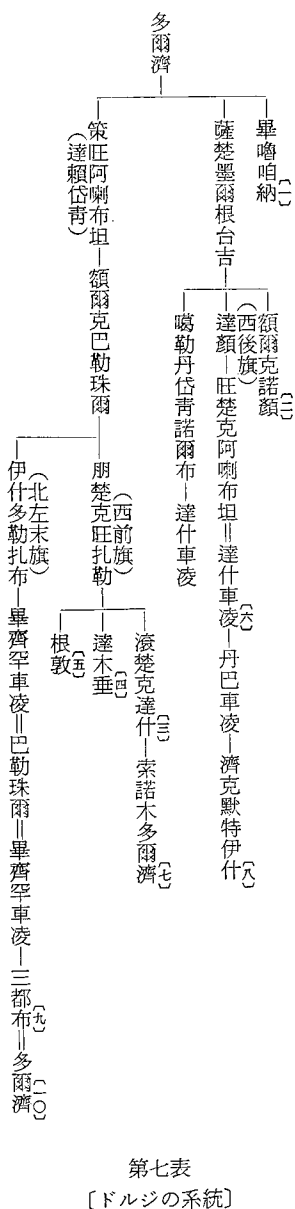
佐藤長

目次

- 一 グシハンの青海進駐
- 二 青海ホシヨト部の成立とその範圍
- 三 青海ホシヨト部の系統とその牧地
 - (一) オチルハンダヤンの系統
 - (二) オンボの系統
 - (三) ダラнтаイの系統
 - (四) バヤンアブガイアユシの系統
 - (五) イルドゥチの系統
〔以上本巻一號、以下本號〕
 - (六) ダライバートル・ドルジの系統
 - (七) ホルムシの系統
 - (八) サンガルジャの系統
- (九) ダンバートルの系統
- 四 その他の諸部の系統
 - (一) ハナクトシュトゥの系統
 - (二) セレンハダンバートルの系統
 - (三) ジョトババートル(ジュンガル部)の系統
 - (四) ジョリクトホシヨチ(ジュンガル部)の系統
 - (五) クンゲ(ホイト部)の系統
 - (六) ブイホオルレク(トルゴート部)の系統
 - (七) オングイ(トルゴート部)の系統
 - (八) ドルジアラブダンイルドゥチ(ハルハ部)の系統
 - (九) チャガンノムンハンロラマの系統
- 五 結語

(六) ダライバートル・ドルジの系統

多爾濟號達賴巴圖爾、爲扎薩克貝勒朋素克旺扎勒、達什車凌、台吉伊什多爾扎布三旗祖。とあるが、系譜は第七表のごとくである。



- 〔第七表註〕
- 〔一〕 シイロジンナ Bayiro tsana < Bahi ro tsa na < skt. Vairocana (毘盧舍那) 〔二〕 エルケノヤン Erke noyan
 〔三〕 シンチャクダム Gincik dasi < Dkon mchog bkra gis 〔四〕 ダムチヤン Damcui < Dam chos 〔五〕 ゲンヌン
 Gendun < Dge hdun 〔六〕 ダンツェリン Damba tsering < Bstan pa tshe rin 〔七〕 ソノムドルジ Sonom dorji < Bsod
 nam rdo rje 〔八〕 シタメイトーン Jigmed yešei < Higs med ye ges 〔九〕 サムツェン Sandub < Bsam grub
 〔一〇〕 ドルジ Dorji < Rdo rje

ドルジの系統は、清朝に重んぜられていた。というのは崇徳七年に、第五代ダライラマが清朝に遣使入貢したときに、ドルジはその配下の哈喇扈濟^① Qara kiji を同行せしめており(太宗實錄卷六三、一九丁表、卷六四、一一丁表)、順治二年十二月にはドルジ自らが入朝している(世祖實錄卷三二、五丁表、卷二五、三丁裏)。同じく七年十一月に「厄魯特の巴圖魯貝勒」が入朝しているが(世祖實錄卷五一、五丁裏)、これもドルジと考えられる。順治八年十一月に「厄魯特の巴圖魯貝勒」布額爾德尼^② Ombu erdeni が罪を得て青海に逃れたとき、順治帝は「巴圖魯台吉」に善處することを要求しているが「世

祖實錄卷六一、四丁表)、この巴圖魯台吉もドルジを指したものであろう。同じく九年十二月に進貢した巴圖魯諾顔も同一人と考えられる(世祖實錄卷七〇、一六丁表)。

更に順治十三年八月に、帝は厄魯特の巴圖魯台吉、土謝圖巴圖魯戴青に境界を守ることを厳しく諭しているが(世祖實錄卷一〇三、一〇丁裏)、この巴圖魯台吉もドルジに相違ない。土謝圖巴圖魯戴青は前に觸れたごとくオンボがその功により清朝から與えられた稱號である(本論文上九二頁)。同じく十四年四月には、グシハンの罽祭に、彼が表謝しているところを見ると(世祖實錄卷一〇九、一九丁裏、表傳卷八二、九丁表)、彼が當時青海タイジ等の代表的存在であったことが窺われる。康熙十八年四月にはエチナ方面のオイラト額爾德尼和碩齊 *Erdeni gosinzi* がウラト *Urad* 方面を掠奪したが、この處置についても、康熙帝はドルジに諭して解決を促している(聖祖實錄卷八〇、一五丁表)。

一方彼は中央チベットにいる長兄オチルハン、第五代ダライラマとも連絡があり、度々ラサに赴いているが、そのとき恐らく、青海タイジの代表者として彼の地位が一層明かに示されたことと思う。第五代ダライが彼にダライホンタイジ *Dalai gong tayiji* の稱號を贈ったのも(Notes, p. 267)その故であろう。吳三桂の亂に、吳はドルジに金幣を贈與したが、彼は遂にこれに與しなかつた。康熙帝はこのときダライの援助で、ドルジに説得を行なっているが(聖祖實錄卷五四、一六丁表)、これも青海タイジに對するドルジの政治的影響力の大きさを思わせる一つの證據である。

康熙三十六年に、清廷は使者を送り、青海へタイジを集めて盟を約したが、そのときダライダイチン *Dalai dayicing* (ツェワンアラブダン *Tsewang arabdan* / *Tshe dban rab brian* 策旺阿喇布坦)に入朝を促した。それはドルジの子であるから「之を重んじた」のであるという。そのときドルジは既に死し、ツェワンアラブダンの時代となっていたので、彼は自ら入朝した(表傳卷八二、一〇丁表)。ツェワンは康熙四十四年に死し、帝はその年の五月に遣官致祭し(聖祖實錄卷三二二、五丁表)、同時にその子の額爾克巴爾珠爾 *Erke baljur* (*Dpal hbyor*)に襲爵を許している(聖祖實錄卷三二二、一七丁表)。エルケバルジュルの死は康熙四十五年で、その年の七月に遣官致祭されている(聖祖實錄卷三二六、五丁表)。

(1) ポンソクワンジャル Pünsük wangjal ʘ Phun tshogs dbaŋ rgyal 系

ボンソクワンジャルは、父エルケバルジュルの後を繼いだが、郡王の爵位はここで止められ、康熙四十六年正月に彼は多羅貝勒に叙されている（聖祖實錄卷二二八、四丁表）。ボンソクは五十四年に、轉生したばかりの第七代ダライ、カルサンギヤムツォ Skai bzan rgya mtsho をリタンから西寧に遷すのに力を致し（表傳卷八二、一二丁表）、六十一年には命を受けてジュンガルの侵入に備え、ガス路に駐防した。ロブザンダンジンの亂には、最初それに與し、エルデニエルケトクトネーの牧地を掠奪したりしたが（方略卷一一、雍正元年七月己卯の條）、清軍至るに及んでこれに歸順し、反亂軍のチャイラクノムチ Cuyiyar (ʘ Chos grags) nomci (吹喇克諾木齊)、『ダシドンドゥブ Dasi dondub ʘ Bkra gis don grub (扎什敦多布)』をガス方面で擄えた（方略卷一三、雍正二年二月丙寅の條、表傳八二、一二丁裏）。協力の故を以て雍正三年には扎薩克を授けられたが（表傳卷八二、一二丁表）、西前旗 Barayun emün qosiyun がこれである。牧地は遊牧記では布喀河 Buga rool の南岸にあり、十三排圖では布喀河中流南岸に貝勒彭蘇克旺扎勒と標されている。中華地圖集では、都蘭の湖の南岸にある。

(2) ダシツェリン Dasi tsering ʘ Bkra gis tsho rin 系

康熙二十九年に、清廷はジュンガルのツェワンアラブダンの所に使者を遣したが、それが青海で、タイジ・アギロブザン Aygi loddzang ʘ Nag gi blo bzan (阿奇羅卜藏) なるものに掠せられた。ダシツェリンの祖父薩楚墨爾根 Sa skyoŋ mergen^③ はこれを責め、掠奪物を皆朝廷に返し、アギに代って謝罪した（要略卷九、二四丁裏）。彼は對ガルダン戦には觀望の計をなしたが、間もなく死し、ダヤン Dayan (達顔) が後を繼いだ。ダヤンは康熙四十二年八月に入朝しており（聖祖實錄卷二二三、四丁裏）、五十四年から翌年にかけては一部の兵を以てツァイダムからガスに通ずる察罕齊老圖 Cayan cīlayutu に駐牧し、ジュンガルのツェワンアラブダンの侵入に備えた（表傳卷八四、一丁表）。而して五十五年十二月に功を以て彼は貝勒に封ぜられている（聖祖實錄卷二七〇、三〇丁裏）。この年に清朝では霍爾の番族をダヤンに轄せしめている

が(表傳卷八四、四丁表)、霍爾はカムの北方のホル Hor の地方を指すのであろう。ダヤンは五十八年六月に死し(聖祖實錄卷二八四、一八丁表)、後は子のワンチュククラブダン Wangcuy rabdan へ Dhai phyug rab brtan が繼いだ(聖祖實錄卷二八五、一二丁裏)。

ワンチュククラブダンは康熙六十一年に死んだが子がなく、これに乗じて西前旗のボンソクワンジャルはダヤンの所領を奪おうとした。ダヤンの弟ガルダンダイチンノルブ Galdan daycing Norbu へ Nor bu (噶勒丹岱青諾爾布) は吃で後を繼げず、その子の十四歳のダシツェリンが、ダヤンの未亡人ユムツンモキチャガンダラ Yum tsunmo caran dara (玉木楚木察罕達喇) の口添えて後を繼いだ(表傳卷八四、五丁表)。ガルダンダイチンはロブザンダンジンの反亂にはこれに附かず、ボンソクワンジャルと清軍を迎えて賊のチェイラクノムチを追撃して功あり、固山貝子の位を授けられた(方略卷一四、雍正二年五月壬戌の條)。その後繼者は當然ダシツェリンであるが、彼は既に康熙六十一年に固山貝子になっている。ガルダンダイチンの夫人は兩方の兼襲を請うたが、理藩院は、モンゴルに兩世爵を襲う例がないとした。そこで朝廷では、ダシツェリンを貝勒に陞せ、世襲して替ることないのを許した(方略卷一七、雍正五年九月庚申の條、世宗實錄卷六一、六丁裏)。しかし九年にはトルゴートのノルブの反亂に加擔し、貝勒の爵位を貶された(表傳卷八四、五丁表)。

この旗は西後旗 Barayun qoyitu qosiyun で、牧地は遊牧記では柴集河(現在の惠渠)に跨るといふが、十三排圖では柴集必拉の注ぐ達布遜淖爾の西に、貝勒達顔の牧地が標されている。しかしやはり柴集河に跨る方が正しいのであろう。

(3) イシードルジャブ Yesei dorjab へ Ye ges rdor skyabs 系

イシードルジャブはロブザンダンジンの亂の際にこれに附くことなく、雍正三年に扎薩克一等台吉を授けられた(表傳卷八八、五丁表)。扎薩克の繼承については表傳の傳えるところは少しく曖昧である。ビチハンツェリン Biciryan tsering (畢齊罕車凌) はイシードルジャブの子であるが、次のバルジュル Baljur へ Dpal hbyor (巴勒珠勒) についてまた從叔ビチハンツェリンが出てくる。ところでこの同名者が同一人であるかどうかであるが、前代のビチハンツェリンは病を以

ル、ガル不明、或はガルダンの誤か。チエンバルは Coyinbal、Chos hpiel [五] ツェリンドルジ Tsering dorji、Tshe rin do rje [六] シャクドルジヤブ Saydorjab、Phyag rdor skyabs [七] ロブザンツェリン Lobdzang tsering、Blo bzang tshe rin [八] ツェルテンツェルジ Tsersten dorji、Tshe brtan rdo rje [九] ツェルツェル Bajjur、Dpal hbyor [一〇] ガルダンタンジン Galdan danjin、Dgah Idan bstan hdsin

ホルムシは順治六年十月に、河西の回教徒米喇印、丁國棟の反亂に、兄のオンボとともに清軍を助け、西寧城を招降し、功を以て巴圖爾額爾德尼戴青 Bayatur erdeni dayicing の稱號を受けた(世祖實錄卷四六、一四丁裏)。康熙二十三年二月には遣使朝貢し(聖祖實錄卷一一四、一五丁表)、二十四年には自ら入朝した(要略卷九、一七丁表、表傳卷八五、一丁裏)。對ガルダン戦のときも清軍を助けたが、亂の定まらないうちに没した(表傳卷八五、一丁裏)。その子のハダンバートル Qadan bayatur (哈丹巴圖爾)も病のため、三十六年の諸タイジの入朝に参加できず(要略卷一〇、二二丁表)、四十四年に卒した(表傳卷八五、二二丁表)。次のダシンドドゥブ Dasi dondub、Ekra cis don grub に至ってはじめて、他の八タイジの例にならない、輔國公の位を授けられたが、これまた若くして卒し、嗣は絶えた(表傳卷八五、二二丁裏)。

康熙五十七年には、ジュンガルのラサ侵入に關して、朝廷は諸タイジに援兵を出させたが、このときツェリンドンドゥブ Tsering dondub、Tshe rin don grub (車凌惇多布)の母チョクライナムジャル Coylai nanjal、Phyogs las nam rgyal が、所屬の兵萬を出して從軍を願ひ、五十九年の清軍の入藏にはまた糧食を多量に獻上した。六十一年に母子は入朝し、雍正元年にはその功によってツェリンドンドゥブに多羅貝勒が授けられた(方略卷一一、雍正元年正月壬辰の條、世宗實錄卷三、三三丁表)。このとき青海のタイジ等は大小なり小なり封賞を與えられたが、ツェリンドンドゥブのそれは異數であつたといわれる。

ロブザンダンジンの亂には、最初これに加擔したが、清軍が出動したとき、母のチョクライナムジャルはツェリンドンドゥブ及び屬下を連れて降服した(世宗實錄卷一六、三三丁表)。ついでツェリンドンドゥブは大軍に従ひ、ロブザンの一味

ダンジン Danjin へ Besan hdsin (丹津) を擒えて獻じ、その功を以て貝勒より貝子に降等されるだけで終った(方略卷一四、雍正二年五月壬戌の條、世宗實錄卷二〇、二六丁裏)。

(1) ダンバ Damba へ Bstan pa 系

ツェリンドンドゥブには子がなかったので、ビントウの次子ダンバがこの後を継ぎ、雍正三年に扎薩克となった(表傳卷八五、三丁裏)。北右翼旗 Qoyitu barayun yar qosiyun がこれであるが、牧地は遊牧記では青海の北岸であり、十三排圖で台吉策凌敦多布と標されるところがそれであろう。

(2) セブテンボシヨクト Sehten bosoytu 系

彼ははじめ閑散台吉であったが、ロブザンダンジンの反亂に際し、これに付かず、雍正三年に扎薩克一等台吉を授けられた(表傳卷八八、七丁表)。西右翼後旗 Barayun barayun yar qoyitu qosiyun がこれで、牧地は遊牧記では柴達木河に跨っており、中華地圖集ではツアイダム河の注ぐ霍魯遜湖 Kolsün nayur の南にある。

ところでこの兩旗は、一方は青海北岸、一方はツアイダム河口とかなり離れて存在し、ホルムシ時代の本據が何れかは決定しがたいが、ホルムシが河西の回教徒討伐に功績あり、また西寧城を降したということからすれば、青海北岸の方がもともとの牧地ではなかったかと思う。尤もこれは一つの推測である。

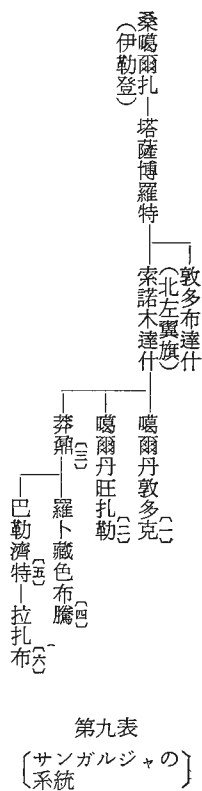
(八) サンガルジャの系統

表傳卷八一、四丁表に、

桑噶爾扎號伊勒登、爲扎薩克貝子索諾木達什一旗祖。

とあり、表傳その他によって系圖を作ると第九表のごとくなる。

サンガルジャとその子の塔薩博羅特については、中國側には殆ど史料がない。



〔第九表註〕

- 〔一〕ガルドンドンドップ、敦多克とあるが敦多布に解する。Galdan dondub 〱 Dgañ Idan don grub 〔二〕ガルドンワンジヤル Galdan wangjal 〱 Dgañ Idan dban rgyal 〔三〕マンナイ Mangnai 〔四〕ロブサンセブテン Lobdzang sebtan 〱 Blo bzang tshen bran 〔五〕不明 〔六〕ラジヤブ Lajab 〱 Lha skyabs

(1) ソノムダシ Sonom dāsi 〱 Bsod nams bkra gis 系

康熙三十六年に青海タイジが内附したときには、ソノムダシ兄弟は幼少であったので、避痘のため入覲しなかった(要略卷一〇、二二丁表、表傳卷八五、五丁表)。五十九年のジュンガルのラサ侵入のときには、ドンドップダシ Dondub dāsi 〱 Don grub bkra gis (敦多布達什) はツアイダムに駐し、清軍と協力し、後ダライの入藏にはこれを護衛して清軍と行動を共にした。この功で鎮國公に封ぜられたが(方略卷一一、雍正元年二月己亥の條)、間もなく没した。ロブサンダンジンの亂には、その弟のソノムダシはロブザンの隣牧であったので忽ち擒えられたが、脱走して清軍に投じ、ツアイダム方面で活躍し、固山貝子に進んだ(方略卷二二、雍正元年十一月辛卯の條)。北左翼旗 Qoyitu jegün yar qosiyun がそれで、その牧地は遊牧記に、

東至哈喇諾爾、南至科爾魯克、西至窩果圖爾、北至伊克柴達木。

とあるから、十三排圖に布隆吉爾淖爾 Bulanggir nayur の南、哈喇淖兒 Qara nayur と胡魯魯淖兒 Qurluy nayur の

間の公教多布達什とある所であろう。公というのは、彼が康熙四十四年に輔國公、雍正元年に鎮國公に晉んでいるからで（表傳卷八五、五丁裏）、多分前者の故を以てであろう。

(九) ダンバートルの系統

先に屢々觸れたごとく、對ガルダン戰ののち、康熙帝は青海タイジ等を入朝せしめんとした。これに應じ、ダンバートル等は、康熙三十六年四月に入朝せんとしたが、時期的に炎暑の候にかかり、帝自身もその頃寧夏に駐留していたため、秋に來朝することを命じた（朔漢卷四二、三三丁表、聖祖實錄卷一八二、二七丁表、要略卷二〇、一二丁表）。十一月になって、ダンバートルは青海の諸タイジを率いて京師に入覲した（要略卷二〇、一九丁裏）。蓋し彼が中心になったのは、當時グシハンの子で生きていたのは彼だけであり、いわば一族の長老であったからである。清廷では彼を厚遇し、翌年正月に親王の位を授けた（朔漢卷四七、一丁表、聖祖實錄卷一八七、二丁裏）。一方彼はバンチェンラマとも親しく、一六七四、八〇、九〇年には自らタシルンポを訪れており、他の場合にも使者を屢々送っている。一六七八年（康熙三十六年）にも使者を送ったのは、北京に自ら赴いた年であることを考えると、チベット側への了解工作は充分に行なつての行動だったようである。彼が世を去つたのは康熙五十三年（一七一四）で、八十二歳であった^⑧（Notes, p. 382）。

達什巴圖爾—羅卜藏丹津—
—巴朗
—察罕額布根

第十表 「ダンバートルの系統」

その牧地については明記はないが、子のロブザンダンジンやダヤンとともに右翼を領したし（要略卷一〇、三三丁表）、前に南左翼次旗の説明のところで、その牧地がロブザンダンジンのものであったという記録もあるから（本論文上九八頁）、柴集必拉の上流ダブスンノールあたりと見てよいと思う。勿論この系統は雍正元年のロブザンダン

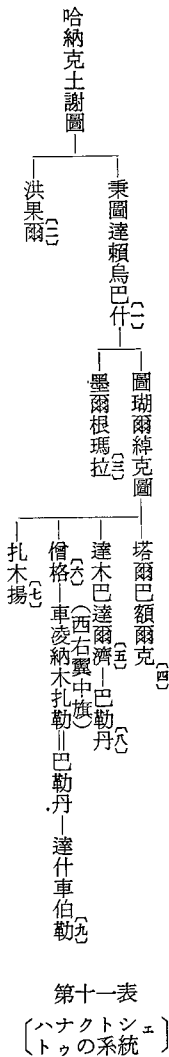
ジン自身の反亂のため清朝の討伐を受け、青海からは消滅してしまった。本人はジュンガルに逃れて餘生を保ったが、乾隆二十年の對ジュンガル戦争のときに捕われ、京師に護送されて死一等を減ぜられた。子二人あり、バラン Barang (巴朗)とチャガンエブゲン Caran ebügen (察罕額布根) といったが、ともに内蒙古正黄旗につけられ、賞給された。

四 その他の諸部の系統

以上八タイジとその系統及び根據地について述べたが、これらの家はすべてグシハン系のホシヨト族であった。しかし青海にはグシハン以外のホシヨトも二系統あり、それ以外にチヨロス、ホイト、トルゴート、ハルハの諸部族が小規模ながら存在した。参考のために、それらについてもままとめて記しておきたい。

(一) ハナクトシエトウの系統

ハナクトシエトウ Qanar tūsiyētū (哈納克土謝圖) はグシハンの兄で、その子孫の系圖は第十一表のごとくである。



〔第十一表註〕

- 〔一〕 ゴンマツタライウバシ Bingtū dalai ubasi
 - 〔二〕 ホンゴル Qonggor
 - 〔三〕 メルゲンツラ Mergen mala
 - 〔四〕 タルノルケ Tarba (≡Thar pa) erke
 - 〔五〕 ダンバダルジ Damba darji
 - 〔六〕 ヤング Sengge
 - 〔七〕 ジャヤン Jamyang
 - 〔八〕 ハルダン Baldan
 - 〔九〕 ダシチン Dalshi cōyimbāl
 - 〔十〕 Hiam dbyans
 - 〔十一〕 Dpal idan
 - 〔十二〕 Dasi coyimbāl
- ≡ Bkra çis chos hphei

ハナクトシエトゥが何時青海に入ったかは明かでないが、恐らく兄グシハンと行動をとともにして遷ってきたものである。順治十四年四月に、「厄魯特の緯克圖台吉」が入貢しているが（世祖實錄卷一〇九、四丁裏）、これがハナクの孫トホルチョクトウ *Turyal coitu*（圖瑚爾緯克圖）であれば、既にこの頃は青海に住したものと思われる。

(1) ツェリンナムジャル *Tsering namjal* へ *Tshe rin nam rgyal* 系

ロブザンダンジンの亂のとき、トホルチョクトウの孫ツェリンナムジャル（車凌納木扎勒）は誘われてもこれに付かず、牧地を掠奪された。雍正三年に清朝では公中扎薩克二を設け、一をハルハ族、一をホショトの彼とした。雍正八年にもジュンガルの掠奪を受け、京師にいたままで死し、子がなかったので、帝は従弟のバルダン *Baldan* へ *Dpal Idan*（巴勒丹）に後を繼がせた（表傳卷九〇、一丁裏）。この旗は西右翼中旗 *Barayun barayun yar donda qosiyun* で、牧地は遊牧記によれば、柴達木河に跨って、東は西右翼後旗界に接しているというから、西右翼後旗の西側に存在したのであろう。中華地圖集では霍魯遜湖 *Kolsün nayur* の西南に存在する。

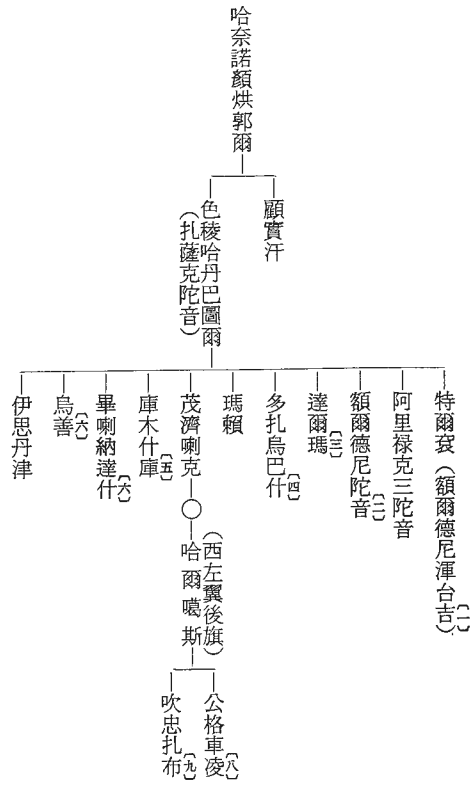
(二) セレンハダンバートルの系統

表傳卷八一、四丁裏には、

顧實汗弟色稜哈丹巴圖爾、號扎薩克陀音、爲扎薩克台吉哈爾噶斯一旗祖。

とあるが、セレンハダンバートル *Sereng qadan bayatur*（色稜哈丹巴圖爾）の系譜は第十二表のごとくである。

セレンも青海に何時遷ったのかは明かでないが、崇徳八年には來朝しており（太宗實錄卷六四、七丁裏、一〇丁裏）、順治十二年には子のアイルクサントイン *Arluysan toyin*（阿哩祿克三陀音）が駝馬を貢し（世祖實錄卷九〇、二二丁裏）、十三年にはその弟のマライ *Malai*（瑪賴）が遣使入貢している（世祖實錄卷九九、六丁裏）。十七年にはアイルクサンは弟のモシラク *Moojirar*（茂濟喇克）とともに自ら入貢しており（世祖實錄卷一三三、三三丁裏、表傳卷八七、六丁裏）、これらの事實を



第十二表
〔セレンハダンバートルの系統〕

〔第十二表註〕

- 〔一〕タルホン Targ'on (Erdeni gong tayiji) 〔二〕エルデニトイン Erdeni toyin 〔三〕ダルマ Darma (碩
 健な者) 〔四〕ドジャウミン Doja ubasi 〔五〕クムシク Kumusiku 〔六〕ビラナダシ、同文志卷一〇、一二丁表では畢
 爾噶達什 Birga dasi 〔七〕ウシヤン Ušan 〔八〕クンガーツェリン Gunga tsering (Kun dgah tshē rin) 〔九〕チ
 イシヤン Chiyashan Coyisunjah (Chos btun skyabs。青海史四四四頁による。東洋史研究第二九卷第一號一一八頁の「一九」項
 参照。

見ると、セレンはかなり早くから兄について青海方面に遷ってきたものと思われる。末子のイシーダンジン Yesēi danjin
 (Ye ges bstan ḥdsin (伊思丹津) のこと)は、諸兄に壓迫されて、康熙五年八月に來歸し、多羅額駙となり、田産僕屬
 を賜わっている(聖祖實錄卷一九、一六丁裏、卷二〇、九丁表)。但し内蒙古西白旗に隸せられ(聖祖實錄卷二〇、九丁表)、後罪

を以て貝勒の爵位を削られ、三等公に降されているから（表傳卷八七、六丁表）、この系統は青海とは關係がなくなつた。

(1) ハルガス *Qaryas* 系

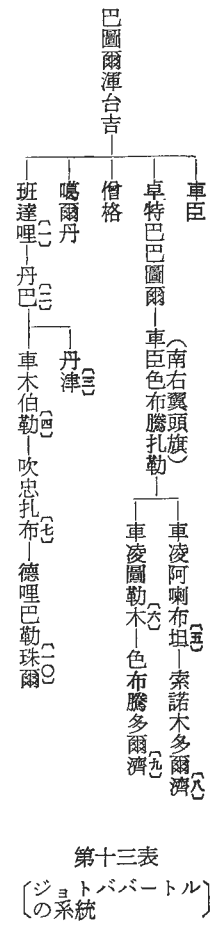
モジラクの孫ハルガス（哈爾噶斯）は、ロブザンダンジンの亂のときこれに加擔せず、雍正三年に扎薩克一等台吉を授けられた（表傳卷八七、六丁裏）。西左翼後旗 *Barayun jegün yar qoyitu qosiyun* がこれで、牧地は遊牧記によれば、やはり柴達木河であるが、西は西右翼後旗に接しているというから、ツアイダム河の中流域であろう。中華地圖集でもツアイダム南岸にその旗が置かれている。現在地圖の和碩特西左后旗はツアイダム盆地の南邊であるが、少しく前代より移動しているのではないかと思う。

(二) ジョトババートル（ジュンガル部）の系統

ジュンガル族には二系統ある。表傳卷八一、五丁表に、

準噶爾設扎薩克二、其始祖孛汗……〔子孫〕巴圖爾台吉駐牧阿爾台、子十一……曰卓特巴巴圖爾徙牧青海、爲扎薩克郡王色布騰扎勒一旗祖……曰卓哩克圖和碩齊、爲扎薩克輔國公阿喇布坦一旗祖。

とある。ジョトババートル *Jotba* (≡ *Mdsod pa*) *bayatur* が青海に遷つた事情は次のごとくである。バートルホンタイ *Bayatur gong tayiji* が死し、子のセンゲ *Senge* ≡ *Sei ge* が繼いだとき、ジョトバは兄のチェチェン *Cecen* とともにセンゲに對抗して父の屬産を争つた。蓋し兩人はセンゲの異母弟であるからで、その結果センゲを劫殺した（一六七一年）^⑧。そこへセンゲの同母弟のガルダンが、ダライラマの後援を待んで歸郷し、チェチェンを殺して自らジュンガル王となつた（一六七二年頃）。そのときジョトバは逃れて青海に入り、これより彼の系統は青海に住することとなつた（要略卷九、九丁裏、表傳卷八三、一丁表）。その系圖は第十三表のごとくである。



【第十三表註】

- 〔一〕マンダル Bandar < Phan dar 〔二〕マンバ Damba < Bstan pa 〔三〕マンミン Danjin < Bstan hdzin 〔四〕ナムンヤル Cömbel < Chos hphel 〔五〕ツェリンアソバタン Tsering arabsan < Tshe rin rab brtan 〔六〕ツェリンツルチム、圖勒木は圖勒濟木の誤と見なす。 Tsering tsulcim < Tshe rin tshul khriims 〔七〕チイイチミンジャブ Coyicongjab < Chos skyon skyabs 〔八〕ソノムドルジ Sonon dorji < Bsod nams rdo rje 〔九〕ヤンテンドルジ Sebran dorji < Tshe brtan rdo rje 〔一〇〕デラクバルジマン Deleg baljur < Bde legs dpal hbyor

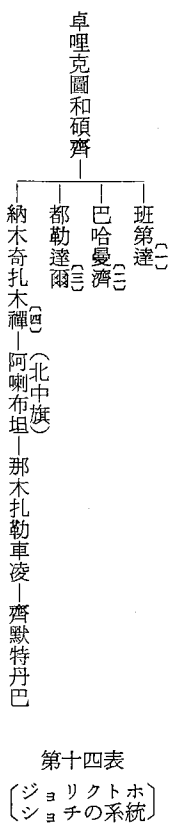
(1) セブテンジャル Sehtenjal < Tshe brtan rgyal *

ガルダンの亂が鎮定された後、清朝は康熙三十六年に青海の諸タイジを招いて入朝させた。しかしそのときジヨトバは既に死し、子のセブテンジャルは幼少であったので入朝はできなかった(要略卷一〇、二二丁表)。漸く康熙五十一年八月に來朝し(聖祖實錄卷二五〇、二九丁表)、五十四年にはダライラマをリタンよりクンブムに移すのに力を致した(方略卷二、康熙五十四年四月辛未の條、卷三、同年九月壬午の條)。ロブザンダンジンの亂にはロブザンに西寧を掠取することを命ぜられたが従わず、陰に使者を遣して朝廷に實情を告げた(表傳卷八三、二丁表)。雍正二年に大軍が至るとこれを迎え、貝勒ロブザンチャガン(南左翼末旗)、輔國公ノルブ(トルゴート族)などを内附させた。この亂における彼の態度は一貫して親中國であり、その中心人物としての役割を果たしている。これらの功により、廟議は青海ジュンガルをホンヨトの隸下から切離すことを決定し、雍正三年に彼は扎薩克を授けられた。順序からいえば、既にアラブダンがジュンガルの扎薩克となっ

ていたのであるが（後述本頁末）、ここに新一旗が増設されたのである（表傳卷八三、一丁表）。南右翼頭旗 *Coros enün* *barayun yar terigin qosiyun* がこれで、牧地は遊牧記によれば、青海の東南岸にあるというが、十三排圖では、ボロチーンケク河の上流に台吉色布特扎爾^⑧と標されるのがそれであろう。中華地圖集では、湟源の西南、青海の湖岸近傍にある。

(四) ジョリクトホシヨチ（ジーンガル部）の系統

ジョリクトホシヨチ *Joritu qosiyuci*（卓哩克圖和碩齊）もバートルホンタイジの子で、ガルダン戦争を避けて兄のジヨトババートルに従って青海に移り、ホシヨト族に依倚していた（要略卷九、九丁裏）。その系譜は第十四表のごとくである。



〔第十四表註〕

- 〔一〕バンディタ *Bandita* ≪ *Pandita* 〔二〕バガテンシ *Baya manji* (≪ *Sman rie*) 〔三〕ドルタル *Doldar* ≪ *Hgerol thar* (?)
- 〔四〕ナムゲジャムチェン *Namge jamcen* ≪ *Gnam mkhah byams chen* 〔五〕チメットダバ *Cimed damba* ≪ *Hehi med bstan pa*。但し青海史四四四頁には *Hehi med zla ba* である。

(1) アラブダン *Arabdan* ≪ *Rab brian* 系

アラブダン（阿喇布坦）が扎薩克を授けられたのは、他に比して少しく早い。彼は康熙五十五年に入朝したが、そのと

き扎薩克一等台吉を授けられている。表傳卷八六、四丁裏には、

時遊牧青海之和碩特、土爾扈特、輝特、喀爾喀諸台吉、皆未編設旗隊、獨以阿喇布坦領其族、賜扎薩克職。

とあり、ホシヨト以外では最初に旗の編成が許されたことを伝えるが、その原因は必ずしも明かでない。しかし同書はジュンガル系がホシヨト族と婚姻を重ねており、例えばチャガンダンジンの弟ゲンデルはガルダンの女と婚し(本論文上一〇二頁)、アラブダンもガルダンの甥に當り、チャガンダンジンの女を娶っていることを述べ、ガルダン戦争の後も、彼に加擔しない青海ジュンガル系は青海での遊牧を許され、婚姻も認められたことをいう(表傳卷八六、四丁表、要略卷一〇、三五丁表)。従ってアラブダンは青海では第一等のジュンガル系と見なされ、その姻戚関係にも拘らず、ガルダンに加擔しなかつたのが認められたのであろう。ロブザンダンジンの亂にも、エルデニエルケトクトネーとともに兵萬を率いて青海の牧を守り、亂後輔國公に晉められた(方略卷一四、雍正二年五月壬戌の條、世宗實錄卷二〇、二六丁裏)。

この旗は北中旗 *Coros goyitu domda qositum* と稱され、牧地は遊牧記によれば、青海湖の西北岸であるが、東は北右翼旗、南は北前旗、西は北右末旗に接するといふから、西爾噶必拉 *Siryal bira* のあたりにあつたのであろう。中華地圖集ではブゲ河の支流ブゲイン河の西側にある。

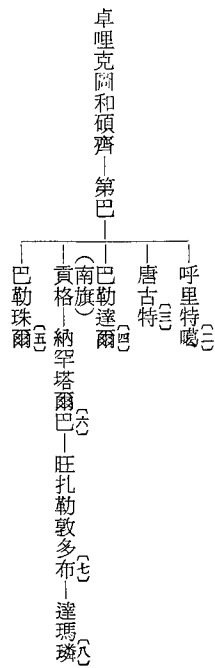
なおアラブダンの子ナムジャルツェリン *Namjal tsering* (那木扎勒車凌) は乾隆十五年(1750)にチベットで起つたジェルメトナムジャル *Jurmed namjal* (朱爾默特) の反亂の際、ラサに至り、ダライラマを保護する功を立てたので(表傳卷八六、五丁表)、その名をチベット史にも残している。

(五) クンゲ (ホイト部) の系統

ホイト族 *Oyid* (輝特) は姓はイェヘミンガン *Yeke minggan* で、一系統だけである。表傳卷八一、六丁裏に、

輝特設扎薩克一、其始祖納木占、再傳至卓哩克圖和碩齊、爲扎薩克輔國公貢格一旗祖。

とある。系譜は第十五表のごとくである。



第十五表
〔クングの系統〕

〔第十五表註〕

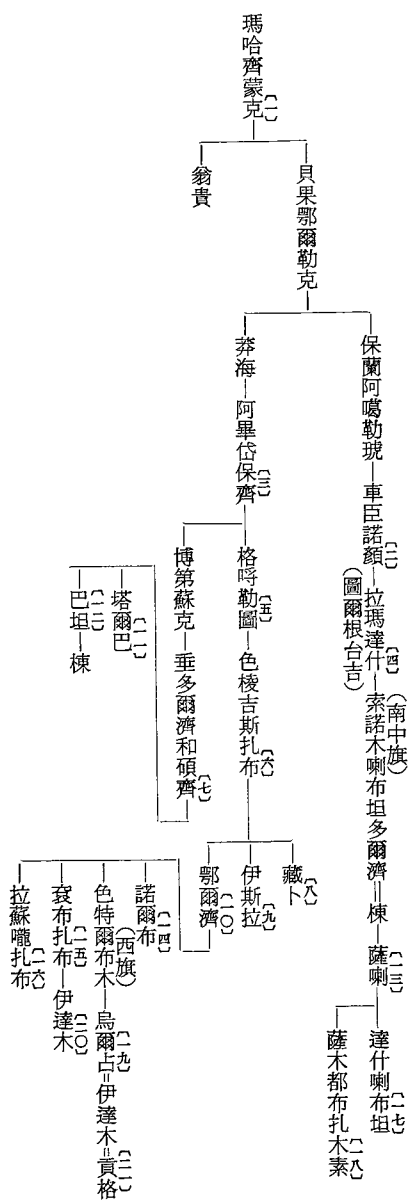
- 〔一〕デ、Diba↗Sde pa 〔二〕ホリトガ Quritpa 〔三〕タングー Tangyud 〔四〕バルダル Baldar↗Dpal dar(?)
 〔五〕バルシタル Baljur↗Dpal hbyor 〔六〕ナンタル、Nayan tarba↗Nag dbaṅ thar pa。清史稿王侯表では納罕塔爾
 巴。但し同文志卷一七一六丁裏では阿哈達爾巴 Aqa darba (↗Thar pa) 〔七〕ワンシヤルドンドワン Wangjal dondub↗
 Dbañ rgyal don grub 〔八〕タムリン Damarin↗Rta mgrin

ホイト族はジュンガリアでも大した勢力はなかったが、青海においても同様で、ホシヨト族に隸していた(表傳卷八六、一〇丁表)。恐らくホシヨトの東遷のときに、一部が付き随って青海に入つたのであろう。クング Kūngge↗Kūngge↗Kun dgah はロブザンダンジンの亂に、一族を率いて清軍のために戦つたので、亂平定後清朝ではこれをホシヨトから引離し、獨立した一旗とすることを定めた。雍正三年にクングは扎薩克一等台吉を授けられた。雍正九年のノルブの反亂にも軍を率いて出動し、彼を擒えて清軍に檻送したので(方略卷二三、雍正九年六月丁未の條、表傳卷八六、一〇丁表)、輔國公に封ぜられた(方略卷二五、雍正九年八月丙午の條)。旗名は南旗 Qoyid emün qosiyun で、牧地は遊牧記によれば、巴彥淖爾 Bayan nayur の南に當るといふ。巴彥淖爾は十三排圖では、冬科爾の西にあるが、中華地圖集では、旗は恰不恰 Cabciyar の南に置かれている。何れが正しいかは明かでない。

(六) ブイホオルク (トルゴート族) の系統

青海トルゴート族 Turud の始まりは次のごとくである。即ちブイホオルク Buio örleg (貝果鄂爾勒克) の子四人のうち、三男ボランアガルク Boran aralgu (保蘭阿噶勒琥) と四男モンハイ Mongrai (莽海) およびその叔父のオングイ Ongui (翁貴) が、グシハンの青海移駐のときに、これと行動をともした(要略卷九、二丁表)。尤も大宗は、ブイホオルクの孫ホオルク Qo örleg (和鄂爾勒克) に附いてロシアに移っており(前掲書)、青海へ移動したものの勢力は大したものではなかったらしい。最初はホシヨトに附牧し、ロブザンダンジン(魯展丹)の亂の善後策の一つとしてホシヨトから分離し、四旗が設定された。青海トルゴートについては、表傳卷八一、四丁裏に、

土爾扈特設扎薩克四、其始祖翁罕七傳至貝果鄂爾勒克、爲扎薩克台吉索諾木喇布坦多爾濟、色特爾布木二旗祖、別有土爾扈特部十二旗、亦其裔也。貝果鄂爾勒克弟翁貴、爲扎薩克台吉達爾扎、丹忠二旗祖。



第十六表
[ブイホオルクの系統]

【第十六表註】

〔一〕マンチモンケ Magaci mungke 〔二〕チチヤンノヤン Cecen noyan 〔三〕ブユダイボチ Abidai boçi 〔四〕マヤン Blana dasi<Bla ma bkra çis (Türgen tayji) 〔五〕ゲノントッ Gerelti 〔六〕ヤンギスジャン Serengçijab 〔七〕チユイドルシホシニチ Cuyidorji (<Chos rdo rje) qosiyuci 〔八〕ザンホ Dzangbo<Bzai po 〔九〕イスラ Isla 〔一〇〕オルジ Orci 〔一一〕タルバ Tarba<Thar pa 〔一二〕バタン Batan 〔一三〕サラ Sara<Sara 〔一四〕ノルブ Norbu<Nor bu 〔一五〕ゴンホジャン Gombüjab<Mgon po skyabs 〔一六〕ラスロシジャン Lasurungjab<Lha sruhi skyabs 〔一七〕タシランバン Dasi rabdan<Bkra çis rab brtan 〔一八〕サムヤンジャン Sandub jamso<Bsam grub rgya msho 〔一九〕ウルジャン Urgan<U rgyan 〔二〇〕イダム Idam<Yi dam 〔二一〕クンダ Gungge<Kun dgañ

とある。系圖は第十六表のごとくであるが、初期の人名についてはペリオ氏 Paul Pelliot の研究を参考にした。^⑤

青海トルゴートで清朝に朝貢したのは、順治八年四月に、ブイホオルレクの曾孫ボディスク Bodisur (博第蘇克) が最初である(世祖實錄卷五六、一七丁裏、表傳卷八九、一丁表)。しかしその後青海トルゴートは清廷に現れない。

(1) ソノムラブダンドルジ Sonom rabdan dorji<Bsod namu rab brtan rdo rje 系

雍正三年に四旗を設けることが定められたとき、ソノムラブダンドルジはその一人として扎薩克一等台吉を授けられた。同文志卷一七、一七丁裏では、彼の名はソノムタルジ Sonom tarji, Bsod namu thar bgyis (索諾木塔爾濟)であるが、何れの名が正しいかは分らない。彼の死後はその子孫がなく、かなり遠縁のドゥン Dung (棟) が後を繼いだ。この系統は南中旗 Turvud emün domda qosiyun で、牧地は遊牧記では、登努爾達巴漢 Dengnügütei dabaya の陽であり、東岸は恰克圖河の黄河に入る所であるというから、十三排圖では貝勒察布所屬(南左翼中旗)と標される所の西に當る場所であろう。

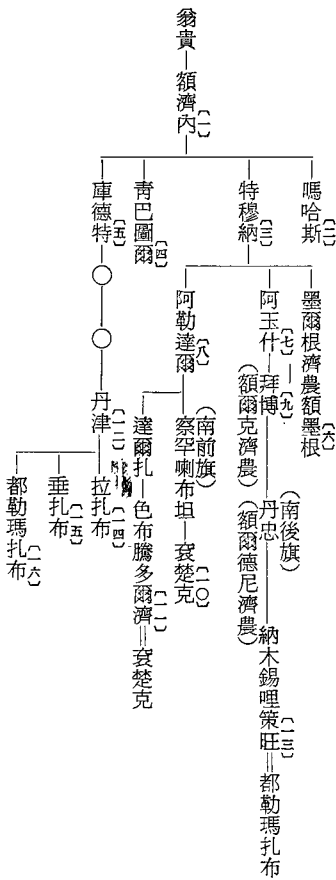
(2) セテルブム Seterbum<Tshe thar hbum 系

セテルブムの兄ノルブはロブザンダンジンの反亂のときこれに附し、後罪を悔いて、ジュンガル系のセプテンジャルに

附いて來歸し、よつて雍正三年に扎薩克一等台吉を授けられた(表傳卷八九、四丁裏)。ところが同じく九年に騰格里 Turgi (場所不明)に駐屯していたとき反亂を起し、ホシトのラジャブ(南左翼中旗)がこれに附した。ノルブの弟セテルブムは兄に附かず、且つ兵を以てラジャブを討った。ノルブは副都統格默爾、ホイトのグンゲ Gunge (A Kun dga.) (恭格)、ホシトのアラブジ等に討たれ、遂に捕えられた。セテルブムはこのときの功を以て扎薩克一等台吉を授けられた(表傳卷八九、五丁表)。これが西旗 Turtud baratur qosiyun である。牧地は遊牧記では、阿屯齊老圖 Aduru cihurutu であるというから、十三排圖では、黄河の支流哈倫烏蘇 Qalun usu の上流阿墩齊老圖であろう。中華地圖集では、カラノールの西北に存在する。

(七) オングイ(トルゴート部)の系統

オングイ Ongui (翁貴) はブイホオルクの弟で、その系圖は第十七表のごとくであるが、兄の場合と同様、初期の人名についてはペリオ氏の研究によつた。



〔第十七表註〕

- 〔一〕 エジネイ Ejinei 〔二〕 マナス Magas 〔三〕 テムネ Temne 〔四〕 チンバートル Cing baratut 〔五〕 クデッ
 々 Kudet 〔六〕 メルゲンジンン エメゲン Mergen jinong emegen 〔七〕 マホシ Ayusi 〔八〕 アルダシ Aldar 〔九〕 バ
 イネ Bayibo (Erke jinong) 〔一〇〕 タンチマツグン Güncük 〔一一〕 ヤンチンブルシ Seben dorji 〔Tshe brtan rdo rje
 〔一二〕 ダンジン Danjin 〔Bstan hdsin 〔一三〕 ナムシリシマロン Namsiri tsewang 〔Gnam sras tshe dhan 〔一四〕 ラ
 シャン Lajab 〔Lha skyabs 〔一五〕 チョイシヤブ Cuyjab 〔Chos skyabs 〔一六〕 エンマシヤン Dolmajab 〔Sgroi ma
 skyabs

(1) ダルジャ Darja 〔Dar rgyas 系

ロブザンダンジンの亂に、ダルジャ(達爾扎)の兄チャガンラブダン Caran rabdan は右翼のチャガンダンジンとも
 にも來歸し、清軍に従ってロブザンの兵を撃つたので、雍正三年に扎薩克一等台吉を授けられた。しかしノルブの亂に
 は、チャガンラブダンはこれに投じ、清軍が到着しても直にこれに従わなかった。そこで清朝は扎薩克職を弟のダルジャ
 に授け、兄を監視させることにした(表傳卷八九、七丁裏)。この旗が南前旗 Turjud emün urida qosiyun で牧地は遊牧
 記によれば、大哈柳圖河 Yeke qaluyutu tooi の南というから、十三排圖十排西二の伊克哈柳圖必拉の南邊であろう。中
 華地圖集では、同德(拉加寺)の東に存在する。

(2) ダンジン Danjin 〔Bstan hdsin 系

ダンジン(丹忠)はロブザンダンジンの反亂に際し、彼に附かず、扎薩克一等台吉を授けられた(表傳卷八九、一〇丁
 表)。南後旗 Turjud emün goyitu qosiyun がこれで、牧地は遊牧記に、

牧地當碩羅巴顏哈拉山之陽、曰鄂博圖。

とあるから、十三排圖で、黄河の支流哈倫烏蘇の北の鄂博圖 Oburatu のあたりであろう。中華地圖集では興海(大河
 壩)の西に存在する。

右によって青海トルゴートは三旗がハルンウスの流域にあり、一旗がイエハリウトの方面にあったことが分る。

(八) ドルジアラブダンイルドゥン (ハルハ部) の系統

最後にハルハ族 *Qalqa* である。表傳卷八一、六丁裏に、

設喀爾喀公中扎薩克一。

とあるが、系圖は第十八表のごとくである。

格時森扎^(一)鄂特歡諾顏^(二)青達瑪尼默濟克^(三)
(車臣諾顏)

唐古特墨爾根岱青—本塔爾岱青巴圖爾^(四)—墨特卓哩克圖—通讓克^(五)
(南右旗)
 多爾濟阿喇布坦伊勒登—納克額爾德尼阿海—達什惇多布

羅卜藏車木不勒^(七)—車德爾^(八)

第十八表
 (ドルジアラブダンイルドゥンの系統)

〔第十八表註〕

- 〔一〕 ゲレセンジツ + *Gereseje*
- 〔二〕 オトガンノヤン *Otuyan noyan*
- 〔三〕 チンダイニムタイツ *Chindamani müdig* >
- 〔四〕 *Cintamani mu tig* (?) (*Cecen noyan*)
- 〔五〕 バンダルダイチンバートル *Bandar* (> *Phan dar*?) *dayicing bayatur*
- 〔六〕 メトジョリクト、不明
- 〔七〕 トンモク、不明
- 〔八〕 ロブザンチュンメル *Lobdzang cömbel* > *Blo bzan chos hpheh*
- 〔九〕 セテル *Seter* > *Tshe thar*

系圖のうちタングートメルゲンダイチン *Tangrud mergen dayicing* (唐古特墨爾根岱青) の曾孫通讓克は扎薩克輔國公を授けられたが、ハルハの扎薩克圖汗部に隸したので、ここでは觸れる必要はない(表傳卷九〇、四丁表)。タングートの

弟のドルジアラバダンイルドゥン Dorji arabdan üdün (多爾濟阿喇布坦伊勒登) が、牧を青海に移してからこの系統は始まる。而してダシドンドゥブ Dasi dondub < Bkra çis don grub に至って、もはやハルハに歸らず、青海ホシヨトに隸するようになった(表傳卷九〇、四丁表)。

ところでガルダンがハルハを侵したとき、ゲンドゥン Gendun < Dge lhan (根登) なるものがあり、⁸⁾ドルジアラバダンイルドゥンに従い、妻子を連れて青海に逃れてきた。またタングートメルゲンの孫墨特卓哩克圖も難を避けて一緒に逃れ來った。そしてガルダン滅亡の後、ハルハに歸ることを願ったので、牧をアルタイ・イルティシュ、烏隴貴 Urungu Tool の界に賜り、餘の者は青海に留まった。

ロブザンダンジンの亂の際に、ゲンドゥンは清軍に協力したので、朝廷では彼を公中扎薩克とし、青海ハルハ族を領せしめることにした。ところがゲンドゥンは諸タイジと隙を生じ、扎薩克の任に堪えないというので職を罷めさせ、墨特の子の通謨克の下に行かせた。そこでその後任はダシドンドゥブにまわり、乾隆三年に彼が公中扎薩克一等合吉に任ぜられた(表傳卷九〇、四丁裏)。旗名は南右旗 Qalqa emün barayun yar qosiyun で、所在は遊牧記では、青海の南岸にあり、東は和爾河、西は扎哈蘇太河であるというから、十三排圖の和爾必拉から扎哈蘇臺必拉の間の湖岸であろう。

(九) チャガンノムンハンニラマの系統

なお以上とは別に、ラマのチャガンノムンハン Čayan nomun gan がやはり扎薩克喇嘛を授けられ、四佐領を管轄して一旗をなしているが、それは扎薩克等の盟には加わらない(表傳卷八一、六丁裏)。恐らく活佛の故で、政治的動向にはかわらないのが本来の在り方であるからであろう。チャガンノムンハンの牧地は、十三排圖によれば、恰克圖必拉の北、碩爾郭爾必拉の上流にある察罕納門漢と標されるところであろう。中華地圖集では、共和で黄河に注ぐ烏蘭河 Ulayan Tool の流域にこの旗は置かれている。

以上で青海の旗は、王侯のそれが二十九旗、これにチャガンノムンハンのラマ旗が加えられて青海三十旗 *Kuke na'ur-un yucin qos'yun* と稱されるのである。^⑤

右に述べたところによって、八タイジ以来の青海の諸タイジの系譜と牧地は明かになったと思うが、全體として青海の部族がどのような歴史的経過を辿ったかを、最後に概括的に述べておきたい。

グシハンの生前には、青海の諸タイジは非ホシヨト系も含めて一つの統制に服していた。確にグシハンはラサの方面に駐留することが多かったと思われるが、流石に青海が不統一に陥ることはなかった。しかしその直系の第二代オチルハ、第三代ダライハンはなおホシヨト部長とはなったが、有能の君主とはいえず、青海の統一には弛緩がきた。^⑥ 両ハンともラサに住し青海へは遠かったことが、その統制力を一層弱めたのかも知れない。オチルハンの弟ダライバートルは兄弟のうちで最も有能であり、この期の青海の中心人物は確に彼であった。清朝が青海関係の行政問題を處理するには、常に彼を相手として行なっていたことからそのことは伺える。しかし他の兄弟等も亦自由に清朝に入貢していたから、ダライバートルだけが完全な支配権を握っていたともいえないのである。

更に注意すべきことは、この頃青海タイジ等はダライラマの命令をよく聽いていたことである。このことは一見不思議なことに思えるが、彼等とダライとの關係は、崇敬の對象たる聖者とこれを守る檀越との關係で (*STR. p. 95*)、事實、聖者の言に逆らうことは極めて困難であったのである。故に彼等はダライの政治的影響下にあつたことは明かで、それ故に清朝も、ダライバートル等に申入れるときには、必ずダライの口添えを依頼していたのである (六三頁)。

時代が下つて次の世代の活動の時期となると、八タイジの嫡系だけでなく、その兄弟等もかなり自由に行動するようになつた。これらのタイジ等と清朝の關係も濃淡さまざままで多様性を帯びてきた。恐らくチンギスハンの子等がそのウルス

を分割して支配したごとく、分割の原理がこの西モンゴル系にも傳わっていたのであろう。勿論このような分裂的傾向に對して統制を強化する試みが行なわれなかつたわけではない。ダライハンの時代のラザンの行動はそれを示している（ロブザンの亂四頁）。しかし事實としてはこの試みはまず不成功に終つた。ガルダン戦争のときには、青海タイジのうちガルダンに好を通ずるものもいたし、清朝の作戦を助けるものもいた。このような不統一の擴大が、必然的に青海ホショトの全體としての力を脆弱化させていった。第六代ダライが退位し、第七代が新に發見されたときは、チベットに一つの政治的空白の時期が形成された。それに乘じて一七一七年にジュンガルのラサ急襲が敢行されたのである。ラザンハンの敗戦は已むを得なかつたとしても、彼に批判的であつた青海諸タイジのうち、誰がラサに進撃してチベット政府を救つたであろうか。青海タイジ等はチベットの危機を救ふことができず、チベット貴族もまたジュンガルに抵抗する力は持たなかつたのである。しかも第七代ダライは未だ即位できず、前途暗澹たるとき、それを掌中に入れていた清朝の工作が開始されたのである。青海タイジ等は清軍の入藏に隨從するのが漸くで、清朝をして容易にチベット政府を保護する權利を獲得させたのである。チベットのみではない。青海自身についても、清朝のリーダーシップを拒否する力を彼等は失つていたのである。即ち清朝は軍事力を用いることによって聖者をラサで即位させ、自らは他の如何なる王侯よりも偉大なる大檀越であることを中外に闡明したのである。

ロブザンダンジンはラザンハンの死後、新しいチベット王はやはり青海ホショトから出ることを期待し、また當然最高の人格の彼がその選に入ると思ひこんでいた。勿論それは幻想にしか過ぎず、遂に彼は雍正元年（一七二三年）に同調するタイジ七人を集めて反亂に踏切つた。しかし清軍の實力に對抗できるはずもなく、惨敗して、この反亂は容易に鎮定された。そしてその善後策として取られたのが、内モンゴルに倣う旗制の施行であつた。これによって青海タイジ等はその牧地を明確に限定され、活動力を一層減殺されてしまった。事の次第は別稿で述べたとおりであるので再説はしないが（ロブザンの亂）、この反亂が清朝の青海支配を確實なものにする一つの契機となつたことは疑ない。青海の政局に對する、ダ

ライからの影響力は終止符を打ち、清朝の強力な政治的軍事的支配が逆に貫徹したのである。

この亂を経過した後の青海には、民族的な英雄はもはや求めることはできなくなった。しかし清朝における名ある官僚のうちにも、何故か我々は青海出身のものを見出すことはできない。中期以降は青海の諸旗は、ゴロク等の番族に襲われることが多く、清末にはトルコ系の遊牧民、更に回教徒等に徹底的に壓迫される。青海遊牧諸部落は、ロブザンダンジンの亂を以て、歴史の舞臺から完全にその姿を消し、再びその舞臺に登場することはなかったのである。〔完〕

註

- ① グシハンの兄クンドゥレンウバシ *Kündülen ubasi* の子哈喇庫濟(同文史卷一〇、八丁裏)であろうか。
- ② 碩壘烏巴什 *Soloi ubasi* の子で、康熙二十九年の對ジュンガル戦争の發端となったエリンチン *Erincin* の父である(遊牧記卷一〇)。
- ③ 但しこの問題はドルジによっては解決されなかった。というのはドルジの報によると、エルデニホシヨチはその頃活動を始めていたジュンガルのガルダンの叔父チョクルウバシ *Cukur ubasi* の輩下であり、自分らには探しかねるといふことで(聖祖實錄卷八五、一〇丁表)、康熙十八年九月に、帝は更めてガルダンに問題處理の勅を出しているからである(前掲書卷八四、一六丁表)。結局この問題は、康熙二十三年十一月にエルデニホシヨチが、その主人懋都台吉 *Qandu* (ハ *Mkhah hgro*) *tayji* (チョクルウバシの孫)とともに遣使謝罪したので一應の解決を見た(朔漢卷三、四丁表、聖祖實錄卷一一七、一七丁表)。
- ④ このときの康熙帝とダライラマとの交渉、その間におけるドルジの動向についてはアーマッド氏が詳しい研究を行なっている(*STR*, p. 206)。
- ⑤ ドルジは一六九〇年(康熙二十九年)に死んだが、その葬儀は一六九一年正月の祭のうちにタシルンボで、初代チャンジャホクト *Lean skya qutuytu* によって行なわれた(*Notes*, p. 267)。
- ⑥ 實錄の原文は、「多羅郡王額爾克巴爾都爾故」であるが、巴爾都爾は明かに巴爾珠爾の誤である。
- ⑦ 薩楚を *Sa skyon* とするのはアーマッド氏の考えに従う(ロブザンの亂、八頁註一三)。
- ⑧ *Yum tsunmo* ハ *Yum btsun mo* は「皇母」「國母」なる尊稱 *Dara* ハ *akt. Tara* は多羅女神、*Caqan dara* は従つて「白多羅」の意で女性の名に用いられる。
- ⑨ 葬送に際して、康熙帝は官を遣して祀祭している(聖祖實錄卷二六〇、九丁裏)。
- ⑩ 詳しくは「ロブザンの亂」を参照されたい。
- ⑪ 前掲論文二〇頁註一一。

⑬ 公中扎薩克 *Qoruntu jasay* については、表傳卷九〇、二丁裏に、「猶滿洲蒙古八旗之公中佐領也」とあり、遊牧記にもほぼ同様の説明がある。公中佐領 *Qoruntu yin sumun janggai* とは、世管佐領のような世襲ではなく、主管の長官即ち八旗の頭梁 *Gurai ejen* によって佐領下の人から揀んで當てられる佐領である。

⑭ 羽田明「ガルドン傳考證」東方學會創立十五周年記念東方學論集、東京、昭和三十七年、二一八頁。

⑮ 明かに色下騰扎爾の誤である。

⑯ P. Pelliot, *Notes critiques d'histoire Kalmouke, Tableaux généalogiques*, Paris, 1960, Tableau III.

⑰ ボディスタは、世祖實錄に、

厄魯特部落屠爾古特博地蘇克等貢馬、賜銀幣等物。

とあるので、間違いない。ただボディスタなる語は分りにくい。マリオ氏は、「Bodisatu から變形した Bodisang と同じか」と疑っているが (Pelliot, *ibid.*)、蒙古語では Bodisang でなくて Bodisung が普通であろう。勿論この語は *skt. Bodhisatva*, *tib. Bryan chub sem dpah* (菩提薩多) に當る。

⑱ 前掲註⑮

⑲ ゲンドゥンはネヘイエルデニアハイ *Nkei erdeni agai* (納克額爾德尼阿海) の従子であるというが (表傳卷九〇、四丁裏)、ハルハ諸系のうちの従子の輩行にこの名を見出すことはできない。

⑳ 田村實造、今西春秋、佐藤長共編「五體清文鑑譯解」上卷、京

都、昭和四十一年、No. 1169.

㉑ オチルハン、ダライハンの性格については *Notes*, p. 267 を参照されたい。

〔略語表〕

表傳＝「外藩蒙古回部王公表傳」

要略＝祁韻士「皇朝藩部要略」

方略＝「平定準噶爾方略」

朔漠＝「平定朔漠方略」

遊牧記＝張穆「蒙古遊牧記」。特に断りのない限り、同書卷二二、

青海額魯特蒙古遊牧所在。

新志＝楊應琚「西寧府新志」

同文志＝「西域同文志」

十三排圖＝「清十三排圖」。特に断りのない限り、同書九排西二

「蘭州府・西寧府」。

中華地圖集＝張其昀編「中華民國地圖集」第三冊、臺北、國防研

究院、一九六一年。

ロンザンの亂＝佐藤長「ロンザンダンジンの反亂について」史料

第五五卷第六號、京都、一九七二年。

Notes＝Luciano Petech, *Notes on Tibetan History of the*

18th Century, *T'oung Pao*, vol. LII, Livr. 4—5, 1966.

STR＝Zahiruddin Ahmad, *Sino-Tibetan Relations in the*

Seventeenth Century, Rome, 1970.